

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2022年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	コミュニティ政策学科・4年	山下 智加
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・准教授	権 安理
研究課題	まちのデザインと地域コミュニティの活性化 －「シェア金沢」と「まちやど HANARE」を事例にして－	
研究年度	2022年度	
プロジェクト 分担者	桂 萌	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトは、まちのデザインという観点から、地域コミュニティ活性化について、2つの事例を比較検討することを目的としている。近年の日本社会において、少子高齢化や個人化の進展から、地域内におけるコミュニケーションや交流の欠如が社会問題となっている。「まちづくり」や「地域活性化」といった取り組みはその解決を目指したものであり、それには様々な事例があるが、本プロジェクトでは、施設や機能の配置等を意図的に行うことで、個人化が進展する前のかつての「まち」が持っていたような交流やコミュニケーションを活性化させようとする2つの先進的な事例について調査、検討した。

2. 調査対象

1) シェア金沢（石川県金沢市）

社会福祉法人が運営主体となっているまちのデザインである。一つの施設ではなく、サービス付き高齢者向け住宅、アトリエ付き学生向け住宅や障がい児入所施設といった施設、温泉やバー、レストランなどが設けられており、多様な人々にとって便利な居住の場となっている。さらにはイベントの開催や運営について、住民参加型で決められている。

2) まちやど HANARE（東京都台東区谷中）

一つの建物で完結したホテルではなく、「まち全体を一つの大きなホテルに見立てること」（出典：HAGI STUDIO INC.ホームページ）によって地域と一体になったホテルとなっている。フロントと宿泊場所は異なり、後者は古い空き家をリノベーションしたものである。さらに、風呂は地域内の銭湯が使われ、食事は地域内の飲食店でとられる。宿泊するだけでも、一つの施設ではなく、谷中というエリア全体に影響を与える仕組みとなっている。

3. プロジェクトの成果

「シェア金沢」、「まちやど HANARE」の運営主体や現場のスタッフ方へのヒアリング、インターネットや先行研究を参考にしながら調査を行った。前者では、施設に住んでいる人だけでなく、外部の人との交流も大切にしたいという思いから、誰でも利用可能なドックランや温泉をつくり、交流促進のための工夫がされていたことが明らかになった。後者では、ホテルの要素・機能がまち全体に散らばっているため、「まちやど HANARE」だけではなく、宿泊するだけでもエリア全体に利益が出る仕組みになっていることが特徴的であった。そして、ホテルの受付には地域出身者を含んだコンシェルジュが常駐しており、谷中エリアへの丁寧な案内をしたり、地域の人と密なコミュニケーションや情報交換を行っていた。以上から、「まちやど HANARE」は地域内外の人をつなげるハブ的な役割を担っていると考えられる。

以上2つの事例から、多様な施設や機能を一つの場所に集中させるのではなく、まち全体に広げることによって、さまざまな交流やコミュニケーションを促し、コミュニティを活性化するような新たなまちのデザインを生み出していることが明らかになった。